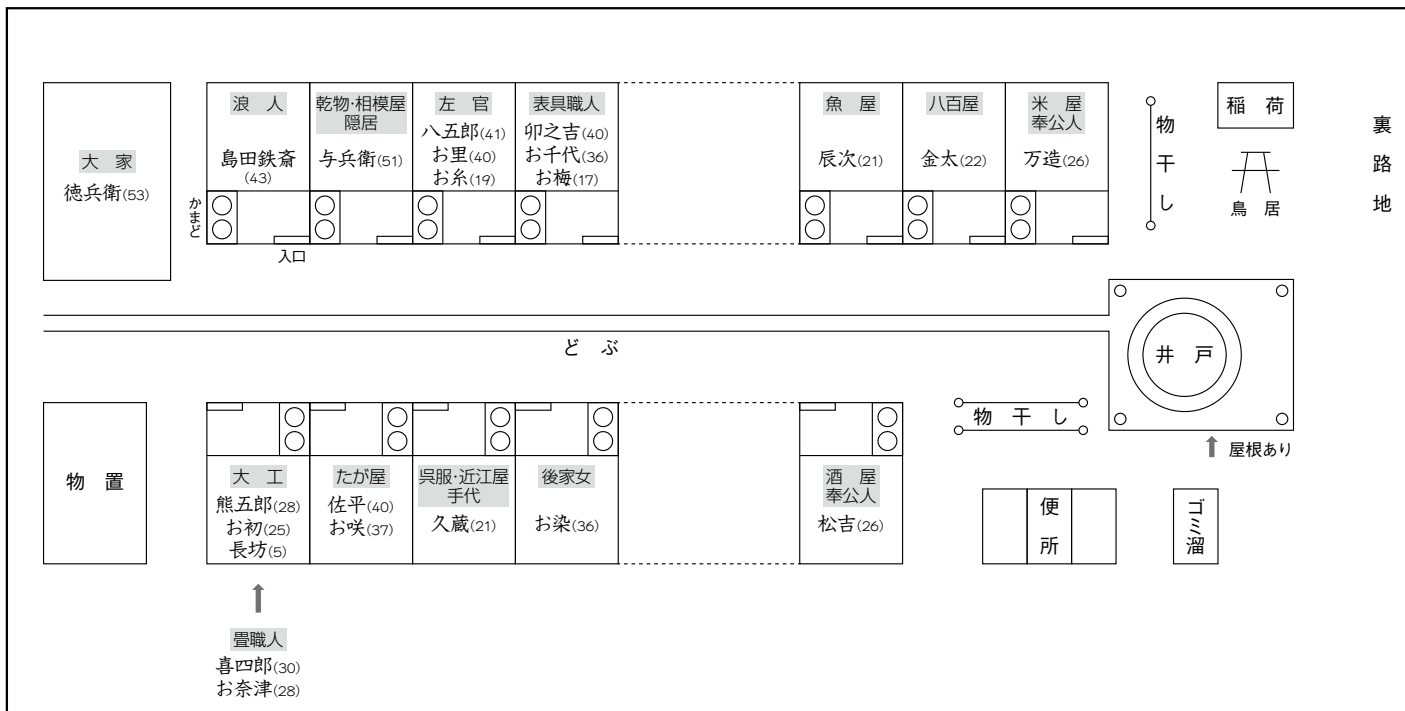
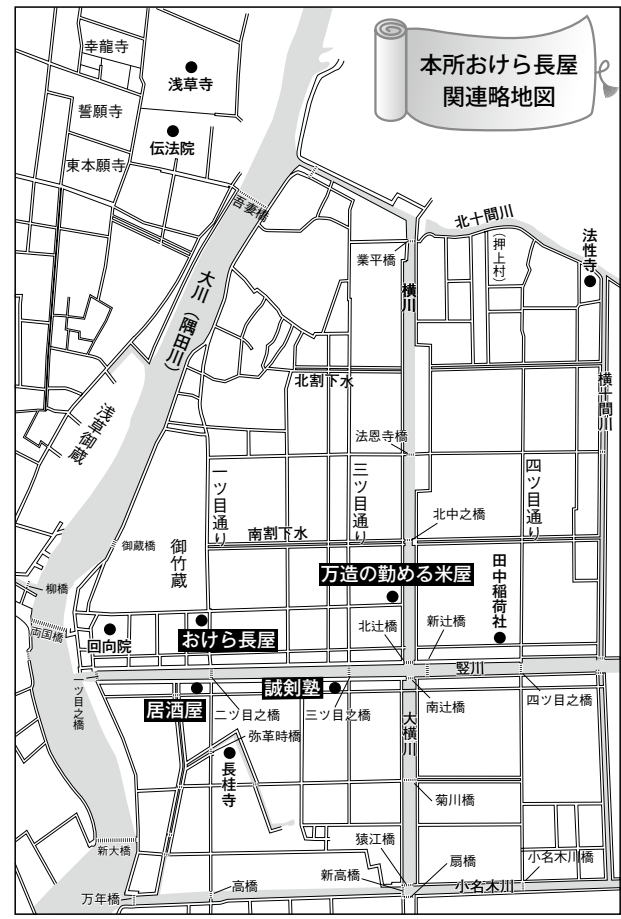


# 本所おけら長屋の見取り図と住人たち



# かんおけ

本所おけら長屋



島田鉄斎が、おけら長屋の住人となって三年が過ぎた。浪々の身であるために正業はない。三ツ目之橋近くの林町にある剣術道場では、師範の補佐役として些少の報酬を得る。腕の方は師範より確かなのだが、出しゃばった真似はしない。おだんなが多額の掛金を集金する際には、用心棒を依頼され、礼金を受け取ることもある。仕官する気などは毛頭ないようで、気ままな長屋暮らしを続けている。おけら長屋に住む侍は鉄斎一人だけだったが、住人との仲は良好だ。鉄斎は、おけら長屋での生活が心地よい湯船に浸かっているように思えた。

島田鉄斎は信州諸川藩の剣術指南役の長男として生まれた。武家に誕生した長男の宿命で、父の背中を追うことが必定とされ、幼いころから厳しい剣術の修行に励んだ。

鉄斎が三十五歳のときに父が退官し、剣術指南役を引き継いだ。その半年後——。突然に諸川藩は、幕府から断絶され、領国は没収された。詳しい理由はわからないが、幕府の陰謀説が有力だった。床に臥せていた父は、その衝撃のせいもあってか他界した。父一人子一人だった鉄斎は天涯孤独となり、信州を後にした。妻子がいけないことは幸運だった。男の一人身なら、なんとか生きていくことができる。

あてのない放浪がはじまって間もなく、絶好の噂を耳にした。陸奥国津軽の黒石藩で、剣術指南役が急逝し、後任を御前試合で決定するという。推薦人などの条件は満たすことができそう。鉄斎は一路、津軽へと向かった。

津軽といえば最果ての北国。予想通り剣術の水準は低かった。鉄斎は順当に勝ち進む。決勝戦の相手は、藩内にある剣術道場の師範、近藤房之介という男だった。大仰な髭をたくわえ、大股で闊歩する威圧的な態度は、いかにも荒くれ者という風体だ。聞いたところによると、近藤房之介は、急逝した元指南役の高弟であり、当然のごとく次の指南役は自分だと決め込んでいたようで、この御前試合を快く思っていないかった。

近藤は決勝戦の前に、藩主高宗公に願い出た。

「高宗公に申し上げる。この御前試合、木刀にて行ってまいりましたが、指南役を決める決勝戦ともなれば戦場と同じと覚悟しております。されば、真剣での立ち合をお認めいただきたい」

鉄斎は、藩主が認めれば受けるつもりだったが——。

「この試合は、剣術指南役を決めるためのものであり、命を落とすためのものではない。真剣での立ち合いは認めるわけにはいかぬ」

穏和な中にも威厳のある言葉だった。鉄斎は、この藩主の下で働きたいと思っ

た。近藤の試合は控え席で見たが、自分が負ける相手ではない。真剣での勝負が認められたら、近藤を斬らねばならない。今は泰平の世の中だ。斬られて死ぬ者より、斬って生き残った者の方が重い荷物を背負って生きていくことになる。藩主の言葉は、そこまで考えてのものだろう。

対峙した近藤は隙だらけだった。心の修行がまるであげられていない。上段に構えた木刀は相手を威圧するだけだ。

奇声を発し、飛び込みざまに木刀を振り下ろしてくる近藤。鉄斎は最小限の動きで体かわすと、近藤の木刀を叩き落とし、自らの木刀を近藤の鼻先に突きつけた。近藤はその場に尻餅をついて醜態をさらすことになった。

「そこまで——」

思えば、この勝ち方がよくなかったのかもしれない。

晴れて、島田鉄斎は黒石藩の剣術指南役として迎え入れられた。藩主の高宗は二十七歳という若さだったが好人物で、何かと鉄斎のことを目につけた。

「鉄斎には感謝しているぞ。近藤房之介という男は、藩内でもとかく無頼漢との噂があり、評判がよくない。鉄斎がいなければ、あの男を剣術指南役にせざるをえなかった。おれは——」

高宗は自分のことを「余」ではなく「おれ」と言った。

「おれは、剣術によって武士の心を訓育してほしいのだ。泰平の世が続いて武士の精神は崩れようとしている。主君への忠誠などという建て前ではなく、己の心の中にある信義、尚武、名誉という武士道精神を育ててほしいのだ」  
田舎大名と揶揄されるような地にも、天晴な藩主がいるものだ、鉄斎は感服した。

鉄斎は高宗の勧めで嫁を娶ることにした。

「おれはな、お前がある日、ふといなくなってしまうような気がしてならんだ」

「そのようなことはありません」

「ならば嫁を取れ。嫁がおれば易々と消えることもできまい」

「ですから、そのような……」

「黙れ。これは余からの厳命である。観念せい、鉄斎」

高宗は手を打った。

「さあ、参られよ」

質素な庭園が見渡せる廊下の角を曲がって、一人の女が出てきた。気品のある美しい女だ。

「結衣と申す。当藩留守居役の娘でな。弘前藩に嫁いだが、亭主と死別して出戻ってまいった。子はおらぬ。おれはな、鉄斎、人物は自分の目で判断する。トウがた

つておろうが、出戻りだろうが関係ない。おれが見込んだ女だ。そして、お前もおれが見込んだ男だ。結衣と夫婦になれ。よいな」

啞然とする鉄斎に、結衣は深々と頭を下げた。

「結衣にございます。不束者ですが、よろしくお願い申し上げます」

鉄斎が三十八歳、結衣が三十一歳。遠くに見える八甲田山の山頂が雪に包まれる晩秋のことだった。

高宗が危惧していたのは本当のことで、鉄斎は自らを根なし草だと思っていた。諸川藩の取り潰し後、深い考えもなく黒石藩にたどり着いたが、ここが終着の地であるのかは自分でもわからなかった。ある日、気ままな風に誘われて、どこかに消えてしまうのではないだろうか。

結衣との生活は、そんな気を一変させた。日ごとに結衣に対する愛しさが増す。夫婦とは、そんなものなのだろうか。鉄斎は日常の何気ない暮らしの中に幸福を感じていた。

桜が満開となった春の夕刻。役宅に戻った鉄斎は異変に気づいた。庭に面した部屋の襖が無造作に開いている。廊下には泥の跡が――。

結衣の名を叫びながら襖を開くと、女が倒れている。結衣は舌を噛み切って自害していた。着物や畳などの状況から複数の人物と争ったことがわかる。抱き起こし

た結衣に意識はなく、その身体は冷たくなりかけていた。

「おのれ、近藤房之介」

それ以外に考えられない。近藤は鉄斎との御前試合で無様な姿をさらして後、道場に通う者もいなくなり、自暴自棄に陥り荒んだ生活を送っていると聞く。

「近藤房之介には注意した方がいいですよ。酒場でも『真剣なら負けなかった』『あの男さえないければ』『必ず殺す』って吠えていたそうですから。近藤には、もう失うものはありません。島田さんへの憎しみだけを抱いて生きています」

島田鉄斎に忠告する者もいた。

実際に、近藤に待ち伏せをされ、真剣での立ち合いを挑まれたこともあった。

「近藤さん、あなたは酔っている。酒の入った人と真剣で勝負などできません。どうしてもというのなら、剣術大会の開催を殿に進言してみましょう。これだけは言っておきます。剣は恨みや憎しみのために使うものではありません。では御免」

結衣は乱暴される前に自害し、貞操は守っていた。鉄斎は結衣の身体を湯灌し、北枕の布団に寝かせてから、家を出た。

近藤房之介は予想通り、安酒場でクダを巻いていた。鉄斎の姿が目に入った近藤は、慌てて刀に手をかけた。

「私がここに来た理由はおわかりでしょうね、近藤さん」

「さあ、知らねえなあ……」

「まあ、いいでしょう。先日、あなたは私に真剣での立ち合いを挑まれましたね。明日の明け六つ（午前六時）に、牛川神社の境内ではいかがでしょう」

近藤は椅子を蹴倒して立ち上がると刀を抜いた。店の女は悲鳴をあげてしゃがみ込んだ。

「明日まで待つ必要はねえ。ここで決着をつけてやる」

「仕方ありません。店の迷惑になります。外に出ましよう」

近藤と酒を呑んでいた二人の仲間も刀に手をかけた。それを見て、鉄斎は二人に言った。

「刀を抜いてはいけません。抜けば敵とみなし、あなたたちまで斬らねばなりません。命は無駄にしない方がよいでしょう」

鉄斎が表に出ると、近藤は背中から斬りかかった。鉄斎はそれを予知していたかのように斜にかわした。

「あの女は自害したんだ。おれが殺したわけじゃねえ。考えてみりゃ、あの女を殺したのはお前なんだよ。お前さえここに来なければ、死ぬことはなかったんだからよ」

斬りかかってきた近藤の剣は空を斬り、前のめりになる。そこに鉄斎の「一刀」。

少しの間をおいて、近藤の首が滑るように落ちた。近藤は首のないまま、二、三歩進み、腰から崩れ落ちた。

「どうしても行くのか」

高宗は無念を顕にした。

「申し訳ございません。近藤房之介を斬ったこと、己の心の中で答えが見つかりません」

「近藤を斬ったことは是非と申すか」

「は、と」

「先に刀を抜いたのも、背中から斬りかかったのも近藤房之介だ。証言する者も大勢いると聞く。よってこれは、武士同士の正式な勝負であり、鉄斎に落ち度はない。近藤側に仇討を許可することもない」

「私は武士に向いていないのかもしれませんが、人を斬る恐ろしさ、後味の悪さを、身をもって知りました。剣術とは何でしょう。私は何のために剣術を指南するのでしょうか……。その答えを見出せぬまま、剣術指南を続けることはできません」

「結衣のことは残念だったな」

高宗は話題を変えた。

「殿の菩提寺の一角に埋葬を許可していただき、深謝いたします。住職がねんごろに供養してくれるようでございます」

「そうか。おれも気にかけておこう。ところで、鉄斎、どこへ行くつもりだ」

「はっ。亡き父の門弟が江戸で剣術道場を開いております。とりあえずは、そこを訪ねてみようと思います」

「何だ、結局は剣術ではないか」

高宗は破顔一笑した。

「江戸に行ったことあるのか」

「十年ほど前に一度……」

「長旅には、よい時節になったのう」

高宗は庭から舞い込んでくる桜の花びらを見つめた。

「はっ。若葉のころにござりまする」

「松島だけは見ていけよ。おれも参勤の折には必ず寄る。あれは絶景だ。手形は用意させた。何かあれば江戸屋敷に行け。話は通しておく。それから、これは些少だが、おれの気持ちだ。受け取ってくれ」

鉄斎は涙を見られぬように、しばらくの間、頭を下げ続けていた。

「答えが見つかったら、いつでも帰ってこい。約束だぞ、鉄斎」

こうして、島田鉄斎は江戸へと旅立った。

おけら長屋の大家、徳兵衛は、東州屋善次郎と吾妻橋を渡っていた。

「気に入った仏像を見つけたというのは難しいものですな。私などは、どれも同じに見える」

「表情が微妙に異なります。まあ、相性というか、直感というか、仏像はご婦人と同じですなあ」

「善次郎さんは、こっちの方も、まだお盛んのように」

徳兵衛はそう言って、笑いながら小指を立てた。廻船問屋東州屋主人の善次郎と徳兵衛は碁会所の常連同士である。今日は、善次郎が浅草に仏像を買いに行くというので付き合うことにした。ところが気に入った仏像は見つからず、蕎麦掻きと、酒を少々腹に入れての帰り道だ。

人がこった返す吾妻橋の上から大川を眺めると、猪牙舟が川を上っていく。

「柳橋あたりから吉原に繰り出すのでしょうか。昼間だというのに結構なご身分ですなあ」

「まったくです」

そのとき——。三間ほど離れた背後から、若い女の叫び声が聞こえた。

「痛い。放せ。放せってんだ」  
振り返ると、浪人風の男が、若い女の手首をつかんでいる。浪人は女を引きずるようにして二人に近づいてきた。

「この巾着は、あなたのものでしょう」

女は細く白い指で丸々とした巾着を握り締めている。善次郎は慌てて懐を手探りする。

「な、ない。ど、どうして……。私の巾着でございます」

「この女が、あなたの懐から巾着を抜き取るところを見まして、捕らえました」

浪人が手首を捻ると、女は苦痛の声を洩らし巾着を落とす。浪人はその巾着を空中でつかんだ。

「失礼ながら中身を確認したい。巾着の中は……」

「は、はい。十両と……、それから成田山の守り札が入っております」

浪人は巾着を徳兵衛に手渡した。徳兵衛が口紐を解き、中身を取り出すと、十両と成田山のお守りが出てきた。

「間違いないようですな。確かにお返ししましたよ。それから——」

浪人は女に鋭い視線を送った。

「この女のことですが、私にお任せいただきたい。よろしいかな」

「そ、それはもう。捕らえたのはお武家様でございますから。私はただ、お礼を申し上げるだけでございます」

「そうですか。それはありがたい。では、ひとつ頼みがある。この女の右手をつかんでいてもらいたい」

浪人は、女の右手を善次郎の前に差し出した。

「両手でしっかりと握ってください。さあ、早く」

気がつけば、あたりには人ばかりができている。善次郎は言われた通りにするが、不安を隠せない。

「あ、あの、お武家様は何を……」

「この女の右手を斬り落とす。巾着切りというのは頭ではなく、手が勝手に動いてしまうと聞く。ならば手をなくすしかない」

女の顔は血の気を失い、声を出すことも儘ならない。徳兵衛も慌てふためく。

「な、何もそこまで……。奉行所に突き出せば済むことでございますよう」

「甘いですな。この女のためだ」

「私からも、お願い申し上げます。十両はこうして戻りました。ですから——」

「問答無用」

浪人は疾風のように刀を抜くと、一気に振り下ろす。そこにいた全員が目をそむ



けた。そして刀を鞘に収める音。女の細い手首には、刀の切先が触れた半寸ほどの細い傷がついた。

「心配するな。血はすぐに止まる。だが傷は残るぞ。その傷を見て、今日のことを思い出さない」

善次郎が手を放すと、女は腰が抜けていたようで、その場にへたり込んだ。

「次に見つけたときは本当に斬り落とす。よいな。では、私はこれにて失礼」

徳兵衛は吾妻橋を渡ったところで、善次郎と別れた。浪人が気になったからだ。

川沿いの道を両国方面に向かつて足早に歩くと、北本所番場町の手前で浪人に追いついた。

「お待ちください。先程は見事なまでのお裁き。感服いたしました」

浪人は爪先で鼻を搔いて苦笑した。

「奉行でもない私に、お裁きとは大層な。いささか余興が過ぎましたかな」

「とんでもないことです。お見受けしたところ長旅のご様子ですが」

肩に笠をかけ、着物や袴のあちこちには継ぎ接ぎが見える。だが「みすぼらしい」よりは「質実」だと思えた。

「ひと月ほど前に津軽を発ちまして、今日、江戸に入った次第です。袴もほろ切れのようになり、見るに堪えない風体になりました」

「これからどちらに」

「両国の先、三ツ目之橋の近く、林町というところです」

「ほー、それは丁度よかった。途中に私の家がございます。家と申しましても汚い長屋ですが、よろしければお茶でもいかがでしょう」

「それはありがたい。千住から歩き通しで喉が渴きました。それに十年ぶりの江戸で道もわかりません。お言葉に甘えることにいたします」

自宅の座敷で浪人に茶を差し出すと、徳兵衛はあらたまって正座をし、自らを紹介した。

「私は、このおけら長屋の大家で、徳兵衛と申します」

「島田鉄斎です。見ての通り、しがない浪人です。どうかお構いなく」

島田鉄斎は膝を正したまま、熱い茶をすすった。

「しかし、津軽からは長旅でございますな。江戸にはどのような……」

鉄斎はそのまま茶を飲んでいる。

「立ち入ったことをお聞きして、申し訳ありませんでした」

「いやいや、陸奥国津軽の黒石藩に仕えておりましたが、役目を解任されました。知人を頼り、江戸に出てきた次第です」

「知人とは、どのような……。あつ、いけませんな。また出すぎたことを」

「林町で誠劍塾せいけんじゅくという剣術道場を開いている方です。もう何年もお会いしておりませんが、他に頼る人もいないので。とりあえず訪ねてみることにしたわけです」  
 女スリの手首を刀の切先で掠めるなど、並みの手練でないはずだ。

「それにしても、よく巾着切りを見抜くことができましたね」

「津軽を発ち、途中の城下町や宿場町の繁華に驚きましたが、江戸は別格です。浅草では人の流れに乗れず右往左往するばかりでした。旅の途中でも、江戸の人波ではスリに気をつけろとさんざん脅かされたもので、常に注意していました」

「なるほど、そうでしたか。善次郎さん……、巾着を抜き取られたのは私の友人で善次郎というのですが、突然のことで、お礼を申し述べる間もなく悔やんでいることと思います。近いうちに一席設けさせることにいたしましたよ」

「いや、それには及びません」

徳兵衛の家の引き戸が勢いよく開き、大きな音をたてる。

「おう、大家さん、いるけえ」

おけら長屋の住人、左官の八五郎だ。

「何だい、八五郎さんかい。相変わらず騒々しいね。見てわかるだろ。お客さんがいらしてるんだよ」

そんな徳兵衛の言葉など無視して、上がり込んでくる八五郎。

「そいつあすまねえな。だけだよ、こつちも待ったなしの話なんでえ」

霧囲気を読んで、立ち上がろうとする鉄斎を、徳兵衛がやんわりと制した。

「まあまあ、島田さん。十年ぶりの江戸とおっしゃいましたな。どうせロクでもない話だとは思いますが、江戸っ子を知るよい機会かもしれませんよ。八五郎さん、この方がいてもいいだろう」

八五郎は無造作に座ると、徳兵衛の茶を一気に飲み干した。

「おっ、二本差しの旦那だんなとは珍しいねえ。おれは構わねえよ。二本差しが怖くて日本橋が渡れるかってんだ」

徳兵衛は小刻みに頭を下げる。

「許してやってください。がさつな男ですが、悪気はないもので」

「何をごちゃごちゃ抜かしてやがるんでえ。大家さん、閻魔長屋のお幸ちゃんのこととは知ってるだろ」

「ああ、お糸ちゃんの友だちの……。お幸ちゃんも不憫な娘さんだねえ。おつかさん、確か、お菊さんといったね。具合がよくないって聞いたが、まさか、お菊さんが……」

「そうじゃねえんだが」

八五郎には十六歳になる、お糸という娘がいる。緑町にある閻魔長屋に住む、

お幸は、お糸の幼馴染みだ。

「お幸の父、茂吉は昨年、長患いの末に亡くなった。医者や薬代などで作った借金を返すために、女房のお菊が身を粉にして働いたが、無理が祟ったのか病床の身となる。借金の形として、お幸は千住の岡場所「河文」に年季奉公に出された。このまま借金が返せない場合、お幸は十七歳になったら客を取らされることになる。女郎になるのだ。それまでには三か月しかなく、病床のお菊が十両もの借金を返すなどは不可能だ。

「昨夜、緑町の閻魔長屋に河文のわけえもんが来やがった。わけえもんといっても岡場所のごろつきだがな。聞けば、お幸ちゃんが河文を抜け出したそう。風の便りに、おっかさんがもう長くねえことを知って、ひと目会いたくなっただらう。無理もねえ話だ」

「すると、そのごろつきどもは、お幸ちゃんを連れ戻しに来たわけか」

「そうだ。捕まりや、ただじゃすまねえ。きつい折檻を受けるだらうよ」

「それで、お幸ちゃんはどうした。帰ってこなかったのかい」

「ああ。おっかさんに会いたい一心で飛び出したものの、冷静になってみりや、店から手が回っていることは承知してらだろ。だからよ、河文のやつらより先に、お幸ちゃんを見つけなきゃならねえってことになる」

「見つけたのか」

「回向院の縁の下に隠れてた。万造と松吉のお手柄だよ。のら猫みてえなやつらだから、妙に鼻が利きやがる。さて、そこでだ——」

八五郎はひと呼吸おいた。

「隠居の隣が空いてるだろ。そこで、お幸ちゃんをかくまうことにした」

「ふーん、隠居って、与兵衛さんの……。な、なんだと。この長屋でか」

「そうだが、何か不満でもあるのか」

「当たり前だろ。それが知れて、そのごろつきどもが押しかけてきたらどうする。怪我人でも出たら、だれが責任をとるんだ」

「そりや、もちろん大家さんだらうよ」

「冗談じゃないぞ」

「あのなあ、大家さん。何か勘違いしてねえか。おれは、あなたに相談に来てるんじゃないんだよ。決まったことを報告に来てるんでえ。四の五の抜かすねえ」

「大家の許可もなしに勝手に決めるな」

「だから、こうして筋を通しに来てるんじゃないかねえか。じゃあ聞か、徳兵衛さんよ。あんた、お幸ちゃんがどうなってもいいってんだな。十六歳の生娘が、裸にひん剝かれて、柱に吊るされて、竹で叩かれ、気を失ったら水をかけられ、手込め

にされて、無理矢理に客を取らされるんだぞ」

「八五郎さん、あんた、やけに折檻に詳しいね」

「感心してる場合じゃねえ。何としても、お幸ちゃんを助けなきゃならねえ」  
徳兵衛は、もうひとつ茶碗を出すと、お茶を淹れ替えた。

「八五郎さんの気持ちはわかりますよ。あんたは、お幸ちゃんのおとつあんと、茂吉さんとも仲が良かったからね。その茂吉さんが亡くなって、自分がお幸ちゃんの父親代わりにならなきゃって思ってたんだろ。お幸ちゃんをこの長屋にかくまうって、すべてが丸く収まるなら、それもいいだろう。だが、それからどうする。閻魔長屋にはごろつきがいる。お幸ちゃんは、この長屋から出られない。十両の借金もそのままだ。先のことを考えての行動なんだろうな」

八五郎は含み笑いを浮かべた。

「大家さん、職人だからって馬鹿にしちゃいけないよ」

「な、何か考えがあるというのか」

「……ありません」

半纏の袖を目頭めがしらにあてる八五郎。

「そんな、でかい凶体ずうたいをして泣くのはやめろ」

行き詰まった二人は肩を落としたが、鉄斎は話を聞きながら静かに目を閉じてい

た。

「ごんちはー。お待たせしました」

外から聞こえる声の主は万造だ。徳兵衛と八五郎が表に出ると、大八車の上に円形の棺桶かかみが積んである。その前に立つ万造と松吉。

「相模屋さんのご隠居、与兵衛さんにおかれましては突然のことで、心よりお悔やみ申し上げます。つきましては……」

二軒先の引き戸が開き、隠居の与兵衛がひょっこり顔を出した。

「えっ、あたしがどうかしたって……」

松吉が慌てて与兵衛を家に押し込み、引き戸を閉める。万造が声を落とした。

「八五郎さん、お幸ちゃんを連れてきました。この棺桶の中に入ってます」

「ば、馬鹿野郎」

八五郎の大声に、万造と松吉は同時に、指を唇くちびるにあてた。

「おめえたち、縁起でもねえ真似をしゃがって」

「そりゃねえでしょう。何としても気づかれねえように、お幸ちゃんを連れてこいって言ったのは八五郎さんじゃねえか。おれと松吉だって、ない頭で考えたんでえ。それで相模屋の隠居が死んだことにして棺桶を借りてきたんじゃないか」

「隠居はどうするんでえ」

「なーに、憎まれっ子世にはばかるってやつで、また息を吹き返しましたって言やあ、それまででしょう」

「確かに、あの隠居ならありそうな話だ。とにかくその棺桶を中に入れろー棺桶を担ぎ込む三人。徳兵衛は自宅に戻ると、鉄斎の前に座り、大きな溜息をついた。

「江戸の長屋というのは面白いところですよ」

「面白いなどとはとんでもない。稀まれに事件や珍事が起きるのならともかく、日常茶飯事はじです。特にこの長屋は騒動の宝庫で、私の寿命は縮まるばかりです」

「それにしても、お達者のようにお見受けしますが。騒動は長生きの特効薬かもしれません」

島田鉄斎の視線を避けるようにして、徳兵衛は微笑ほほえんだ。

「すみません。私のためにご迷惑をおかけして……」

棺桶から出てきたお幸は涙を流すばかりだ。

「お幸ちゃんは、ここで待ってりゃいい。必ずおつかさんに会わせてやるからよ」八五郎は、万造と松吉の方に向き直った。

「さてと、問題は、どうやってお菊さんをここに連れてくるかだ。閻魔長屋にゃ見

張りがいるからよ」

「そのことなら考えてありますよ」

「ど、どんな方法だ」

万造は、お幸をチラリと見た。

「まあ、この場では何ですから、ちよいと外へ出ましようや」

「そうだな。お幸ちゃん、すぐに女房のお里さとと、お糸が来る。ここから勝手に出ちやいけねえよ。わかつたな」

万造と松吉は、空になった棺桶を大八車にくくりつける。八五郎はその作業を見ながら不安げに尋ねた。

「その方法とやらを聞こうじゃねえか」

「おう、松ちゃん、話してやんなよ」

「この棺桶を借りてきたのは、お幸ちゃんを運ぶためだけじゃねえんで。お菊さんは具合が悪いつてんだから、死んじまったことにすれば連れ出せるってことですよ」

八五郎は啞然としている。

「ねっ、こんな話は、お幸ちゃんの前じゃできねえでしょ」

八五郎は万造の胸ぐらをつかんだ。殴られると察知して頭を抱える万造。

「め、名案じゃねえか。こういうことに関しちゃ、おめえたちの右に出る者はいねえな。それじゃさつそく、閻魔長屋に出発だ。大八車はおれが引くから、おめえたちが押せ」

三人が配置についたところで――。

「ちよつと待ってくれ」

大家の家の前に浪人が立っている。

「あなたは、大家のところに行った二本差しの旦那……」

「悪気はなかったが、立ち聞きさせてもらった。いきなり棺桶というのは、まずくないかな」

三人は顔を見合わせる。

「あんたたちは、どうしてお菊さんとやらが亡くなったことを知ったんだ」

八五郎は万造に「答えろ」という視線を投げかけた。

「それは、その……、風の便りとか、町の噂とか……」

「噂だけで、いきなり棺桶を持っていくのか」

絶句する万造に、八五郎が追い討ちをかける。

「それみろ。だから、おめえたちは間抜けだつてんだ」

「八五郎さんだつて、名案だつて喜んでたじゃねえか」

「うるせえ、この野郎」

取っ組み合いの間に入った浪人は、穏和な表情で二人を引き離した。

「仲間割れをしている場合ではないだろう。その閻魔長屋というのは、ここから遠いのかな」

「いえ、すぐ目と鼻の先です」

松吉がその方向を指さした。

「それじゃ、ちよつと様子を見に行つてみようじゃないか。案内してほしい。せつかくだから大八車も引いていくか」

閻魔長屋への路地に入る角に立ち止まる。松吉は顔を半分覗かせて、浪人に教えた。

「右の奥から三軒目が、お菊さんの家です。前に二人、男がいるでしょう。お幸ちゃんを連れ戻しに来たごろつきでさあ」

趣味の悪い着流し姿の男二人が、手持ち無沙汰な様子でうろついている。お菊の家の中から皿を持った女が出てきた。

「あれは――」

「長屋のおかみさん連中が、お菊さんの面倒をみるんで。ごろつきの目的はお幸ちゃんだけですから、それ以外の出入りは自由なんです」

「なるほど。それじゃ行ってくるか。合図をしたら急いで大八車を持ってくるんだ。頼んだぞ」

「ちよつと旦那、行くなって……」

浪人は八五郎たちの言葉などお構いなしに歩きます。お菊の家の前に着いた浪人は、ごろつき二人に何やら話しかけた——、と思つた瞬間、続けざまに刀の柄が、みぞおちに突き刺さり、二人は崩れ落ちた。

「な、何だとー。あの浪人は何者だ。おい、手招きしてるじゃねえか。こうなったら乗りかかった船だ。行くしかあるめえ。万造、松吉、大八車を押すんだ」

お幸の前に棺桶が置かれた。万造が息を切らしながら——。

「お幸ちゃん、おっかさんだよ」

お幸は、その場で泣き崩れた。

「おっかさん、どうして……。生きているうちにひと目会いたかった……。おっかさん……」

八五郎と松吉が、同時に万造の頭を張り倒す。

「馬鹿野郎。少しは状況をわきまえろ。どう考えたって、死んじまつたと思うだろ」

「だってよ、お幸ちゃんだって、生きたまま棺桶に入ってきたんじゃないか」

八五郎が棺桶からお菊を抱き起こすと、お里と、お糸が布団に寝かせる。思ったよりも元気な母の姿に、お幸は安堵したようだ。女たちを残して、四人は徳兵衛の家へと移った。

「ところで、こちらさんは……」

八五郎、万造、松吉の三人は、浪人のことをまるで知らない。

「島田鉄斎というお方だ。浪々の身ということだが、私も今日知り合つたばかりで、詳しいことは何も……」

「島田鉄斎と申します。お見知りおきを」

三人は同時に低頭する。

「しかし、島田さんも無茶なことをやってくれましたな。これからどうするおつもりで」

「江戸は面白いところですね。まだ半日だというのに、次々と事件が起こる。明日からが楽しみです」

徳兵衛は呆れ顔だ。

「笑いごとではありませんよ。手下が二人も倒されたとあつちや、向こうも黙ってはいないでしょう。ここだって、いつ見つかるかわかりません。まあ、何か考えが

あつてのことでしょうが」

「いえ、特に考えはありません」

「そ、そんなあ……。それじゃ、この三人と同じじゃありませんか」

「私は、八五郎さんの話を聞いたり、万造さんと松吉さんの行動を見て感服したのです。先のことを考えてしまつては何もできなくなりません。まさに武士の世界がそうでした。素晴らしいではありませんか。先のことなど考えずに行動する。真実はそこにあるのではないかと。その結果、実際にお菊さんとお幸ちゃんは、あのようにに会うことができたではありませんか。これから起こることは、そのときに考えればよい。自分たちの振る舞いが、天に恥じないことならば、なんとかなるはずです」

この手の話に弱い八五郎が泣きだした。

「島田の旦那、あつしは旦那に惚れました。男が男に惚れました。あつしら三人、命に換えても、お幸ちゃんを守つてみせます」

上の空で話を聞いていた万造と、松吉は我に返る。

「ちよつと待つてくれよ。いつからおれたちが仲間になつたんでえ。おれたちは、ただ、お幸ちゃんを捜してこいつて言われたから……」

「そうだよ。八五郎さん、一歩間違えば、こつちの命も危ねえつてえのによ」

「てめえら、それでも江戸っ子か。もう賽さいを投げちまつたんだ。あとは丁ちやうと出るか、半と出るか、それだけでえ」

肩を落としかけた万造だが、何かが頭に浮かんじようだ。

「大家さん、島田の旦那の腕は相当なもんだ。ごろつき二人が一瞬のうちに気を失つたんですから。やつらはいつ襲つてくるかもしれねえ。しばらくの間、島田の旦那に居てもらいましようよ」

松吉も自らの保身のために続ける。

「そうですね。長屋の連中に、もしものことがあつちやならねえ。島田の旦那が居てくれりゃ百人力だ」

視線が島田鉄斎に集まる。

「私は何の用事もない身ですから。ただし、飯だけは食べさせていただきたい」

しばらくの間、島田鉄斎は徳兵衛の家で暮らすことになった。お菊母娘おやくの部屋は隣なので、異変があればすぐ駆けつけることができる。

「こうしていても埒らちがあきません。これから千住の河文とやらに出向いてみるつもりです」

唐突な切りだしたが、徳兵衛は驚かなかつた。



「八五郎さんたちにも声をかけましょうか」

「いざというときには一人の方が動きやすい。心配は無用です」

千住の賑やかな表通りを折れ、安酒場や遊戯場が連なる下卑た路地の奥に「河文」はあった。宿を兼ねた料理屋であるが、その実は遊女屋である。飯盛り女の本業は飯の給仕ではない。

暖簾を潜ると、見覚えのある男に出くわした。

「うわあー。あ、兄貴、こ、この野郎です。この野郎が閻魔長屋で……」

「おお、元氣そうだな。みぞおちはまだ痛むか」

鉄斎が近づくと、若い男は後ずさりして尻餅をついた。

「た、助けてくれ」

奥に延びる廊下から無表情な男が現れて、腰を抜かしかけている手下の背中を蹴り上げた。

「邪魔だ。すっこんでな」

男の背後には目つきの鋭い浪人が二人。用心棒だろう。

「島田鉄斎と申す。ちと用件があって、お伺いした。よろしいかな」

男は腰を割って独特の挨拶をする。

「そりゃ、ご苦労なこつて。どうぞお上がりください」

鉄斎は六畳の座敷に通された。鉄斎と対峙するのは、その男一人だが、襖の裏に人の気配を感じる。

「手前は、この河文の番頭で銀次と申します。先日は、うちの若いもんがかわいがっていたので……」

「申し訳ない。この通り謝る。こつちも雇い主の命令でな。仕方なかったのだ」  
何か違和感を覚えるのは、この銀次という男の態度だ。虚勢とも思えぬ余裕がある。

「いやいや、もう済んだことですから。それより、島田さんといいましたね。失礼ながら、ご浪人とお見受けしますが、かなりの腕だそうで。どうですか、うちで用心棒として働いてみちゃ」

「面白そうだな。手当はいかほどかな」

「それは、島田さんの働き次第ですよ」

「私を、お幸という娘の代わりに雇うというのはどうだ」

「冗談言っちゃいけません。あの娘は、これから河文の稼ぎ頭になります。島田さんとじゃ釣りが合いませんや」

銀次は鉄斎を馬鹿にしたように笑った。

「そうそう、お幸といやあ、島田さん。都合のいいときに来てくださいましたね

え。島田さんがあつちにいると厄介やづかいなことになるんで。長屋ながやの連中れんちゆうだけなら、赤子あかごの手てを捻ひねるようなもんですから」

この男おとこの余裕よゆうは、やはり悪い暗示あんしだったのか――。

「ど、どういふことだ」

「島田さん、この商売しょうばいを馬鹿ばかにしちゃいけませんぜ。女おんなが逃げるなんてえのはよくあることで。蛇じやの道みちは蛇へびつていうでしょう。女おんなの行方ゆかたなんてもんは、あちこちから耳みみに入いってくるもんです。私の兄貴あにさま分ぶんが若いもんを連れて、もう、おけら長屋ながやに到着とくじやくするころです」

まずい。千住ちぢゆうから本所ほんじよまで走はしっても一刻いっぴやく(二時間)以上はかかる。長屋ながやから離はなれるべきではなかった。とにかく、おけら長屋ながやに戻かえらなければならぬ。鉄斎てつさいは刀やいばを手に立ち上がる。

「もう、間に合わないと思いますよ。島田さん、どんな関係かんけいだか知りませんが、あんな小娘こなご一人に情なさけをかけてるようじゃ、江戸えどでは生きていけませんよ。ああ、それと、用心しんじん棒ぼうの件けん、気が向むかいたらいつでもどうぞ」

座敷ざしきを飛び出した鉄斎てつさいは、銀次ぎんじの笑い声わらいこゑを背せ中に受けながら駆けだした。街道かいだうに出でると、運うん良く、馬うま子ごがやってきた。

「すまんが馬うまを借かりたい。本所ほんじよ亀沢かめざわ町ちやうのおけら長屋ながやだ。馬うまと代金しろがねはそこまで取り

に来てくれ。頼たのむ」

鉄斎てつさいは馬うま子ごの返事こたへも聞きかず馬うまに跨またると、手綱たづなを握にぎって走り去さった。

徳兵衛とくべゑの家に飛び込んだのは見覚えのある娘むすめだ。

「あ、あんた、この長屋ながやの大家だいにやさんだろ」

娘むすめは息いきを切きらして苦くるしそうだ。徳兵衛とくべゑは、その娘むすめを思い出すのに少しの時間じかんがかった。

「お、お前まへさんは、吾妻橋むすめがしの女スリおんなすりじゃないか。な、何なにだい、いきなり」

「詳しいことを話はなしてゐる時間じかんはないんだ。あいつらが来るよ、お幸ゆきちゃんを連れ戻かえしに。三さん、四人よにんはいる。お幸ゆきちゃんがここに隠かくれていることを知しってるんだ。は、早くはやなんとかしないと……」

「嘘うそじゃないだろうな」

娘むすめの表情へいしやうに偽いつはりりはなかった。

「あと、どれくらいでここに来きるんだ」

「四半刻しはんこくくらい」

徳兵衛とくべゑが表うらに出でると、松吉まつきちが井戸いどで水みづを汲くみんでいる。

「おい、大変たいへんなことになった。八五郎やちごろうさんと万造まんぞう、それだけじゃない。長屋ながやの連中れんちゆう

を集めてくるんだ。河文のやつらが、お幸ちゃんを連れ戻しに来る」

「な、何だつて。島田の旦那は」

「その河文に行ってしまった。とにかく人を集めるんだ」

徳兵衛はその足で、お菊とお幸のところに向かう。お幸は、病床で眠る母親の顔を見つめていた。

「お幸ちゃん、おつかさんを起こすんだ。もうすぐ河文のやつらが来る。とにかくここから逃げるんだ」

お幸は何かを悟ったかのように落ち着いている。

「徳兵衛さん、おつかさんを動かすのは無理です。もういいんです。こうして、おつかさんの息のあるうちに会えただけで充分です」

「それじゃ、お幸ちゃんだけでも逃げるんだ。おつかさんのことは心配ない。お里さんや、お糸ちゃんがいるから。さあ、早く」

お幸は、母親の顔を見つめながら――。

「逃げて……結局はその先の方々にご迷惑をおかけするだけです。おけら長屋のみなさんにも、こんなに迷惑をかけているじゃありませんか。十両の借金を作ったのは私たちです。借りたお金は返さなければなりません。だから河文に帰りませう」

徳兵衛は返す言葉が見つからず俯いた。ただ時間だけが過ぎていく。

八五郎、万造、松吉、それにおかみさんたちも集まりました。徳兵衛は、家の前で、お幸の気持ちをもそのまま伝えた。重い空気が漂う。

「関係ねえな」

八五郎が呟いた。

「お幸ちゃんは、お幸ちゃん。おれたちは、おれたちだ。そんな野郎どもにお幸ちゃんを奪われたとあつちや、おけら長屋は江戸中の笑いもんでえ。どうする、おめえたち」

目を向けられた万造と松吉も、この状況では後に引けない。

「こうなりや雪隠の火事だえ。やるしかねえ。おう、松吉、出刃に、心張り棒を持つてこい」

「八五郎さん、あたしたちも、お幸ちゃんを守るからね。薪雑把を持つてこよう」

おかみさん連中も参加するつもりだ。おけら長屋の住人たちが家の前に陣取ったところで、計ったように四人の男が路地に現れた。その姿を確認した一同は、それぞれに武器を手に身構える。その前で立ち止まった四人の中で、一番格上と思われる男が歩み出た。

「江戸の町中で百姓一揆とは笑えるじゃねえか」

「うるせえ。おめえたちこそ何をしに来やがった」

「この中に、お幸っていう娘がいるでしょう。返してもらいてえんだよ。うちの大切な商売もんなんでねえ」

「けーっ、おととい来やがれ。お幸ちゃんは、おけら長屋の客なんでえ。てめえたちなんかに渡してたまるけえ」

長屋の連中も一斉に声を上げる。

「そうだ、そうだ。人の弱みにつけ込みやがって。利子が十一の悪徳金貸し」

「女だからってなめんじゃないよ。すりこぎで脳天をかち割ってやるから」

「帰れ、帰れ。とつとと帰りやがれ」

一触即発の事態となった。男の表情も険しくなる。

「いい度胸だ。だが、おれたちもガキの使いじゃないんでね。おいそれとは帰れねえんだよ。おい」

男が顎をしゃくって指示をすると、背後にいた三人の男が、懐から合口を抜いた。そのとき、馬の蹄の音とともに、鉄斎が長屋の狭い路地に走り込んできた。

「待て、待て、待ってくれ」

鉄斎は馬から飛び下りると、長屋の連中の方を向いて両手を広げた。

「手を出してはいけない。たとえお幸ちゃんを守るためであっても、人を傷つけた

ら罪人だ。ここは私に任せてほしい」

そして、ゆっくりと男たちの方に振り返る。

「あ、兄貴、こいつです」

閻魔長屋の前で気絶させた若い男だ。

「ご浪人さん、困るんですよ。世間の道理ってもんくらい、おわかりになるでしょう」

この男たちを、この場で打ち据えるのは容易い。だが、それからどうする。お幸は紛れもなく借金<sup>たやす</sup>の形に取られているのだ。相手は素人ではない。面子もあるだろうから、お幸を諦めることはない。どうすればよいのだ。

「長屋のみなさん、ご浪人さん。理不尽なのはどちらなんでしょう。何もしていない娘をさらっていきこうってんじゃない。十両の借金が返せないっていうから連れていくんです。ここで十両を用意してくれりゃ、証文を置いてすぐに帰りますよ。どうなんです」

男の言うことには筋が通っている。鉄斎は何も言い返すことができない。

「だいたい、証文つてものを軽くみちゃいけません。奉行所でも正式に通用するものです。その証文に書いてあるんですよ。それを納得して、お幸と母親は金を借りたんです。ほら、ここに、こうして――」

男は懐の中に右手を差し入れる。

「えっ、な、ない。証文が……。千住を出たときには確かにあったのに……」  
この好機に便乗するしかない。

「その証文とやらを見せてもらおうか」

鉄斎の言葉に、男はしどろもどろになる。

「そ、その、証文は店に保管してある。証文なんぞ、関係ねえ」

鉄斎は薄笑いを浮かべた。

「証文を軽くみるなど言ったのはだれだ。とにかく証文を確認しない限り、お幸ちゃんも渡せない。証文を持って出直してくるんだな」

男たちは渋い顔をして引き返していった。

鉄斎は長屋の連中を論ずる。

「あなたたちの気持ちはわかるが、無茶をしてはいけない。今後のことは徳兵衛さんと相談しますから、私たちに任せてください」

徳兵衛の家で渴いた喉を潤した鉄斎は、大きな溜息をついた。

「今日のところは何とか収まりましたが、さて、これからどうすれば……」

徳兵衛も落胆した様子だ。

「まさに八方塞がりですな」

「ところで、昼日中だというのに、八五郎さんや万造さんたちが長屋にいたのは幸いでしたね」

徳兵衛は膝をひとつ叩いた。

「そうだ。島田さん。吾妻橋で捕まえた女スリが訪ねてきたんです。河文のやつらがお幸ちゃんを連れ戻しに来る、つて教えてくれました」

「それで、その女スリは」

「そういえば、それから姿が見えませんな」

鉄斎は静かに立ち上がると、土間に下り、勢いよく引き戸を開いた。

「だれだ」

そこには女スリが立っていた。女と呼ぶにはまだ幼い娘は、座敷に正座をする  
と、懐から書状を取り出し、鉄斎に差し出した。

「こ、これは、お幸ちゃんの証文じゃないか。な、なるほど、そうだったのか  
……」

「どういうことですか、島田さん」

「いきさつはわかりませんが、さっきの男の懐からスツたのでしょう。さて、どう  
いうことか話してもらおうか」

娘は取留めもなく語りだした。

「吾妻橋の後、あんたのことをつけたんだ。理由はあたしにもわからない。スリを見抜かれて悔しかったのかな。それとも、あんたの言葉が心に響いたのかな。とにかく、あんたのことを調べたくなかったんだよ。そして、お幸ちゃんのことを知った。あたしね、十歳まで閻魔長屋に住んでたんだ。お幸ちゃんともよく遊んだ。十歳のときに一家で夜逃げをして、親には捨てられた。でも、捨てる神あれば拾う神ありっていうだろ。女スリの頭に拾われて、今じゃこの有り様さ。でも、お幸ちゃんのごことは助けたかった。今朝、河文<sup>かわふみ</sup>つて店を確かめに行ったんだ。しばらく様子うかがってたら、あの男たちが、おけら長屋に行くっていうじゃないか。兄貴って呼ばれてた男が懐に証文をしまい込むのを見た。あれさえなければ、お幸ちゃんは自由になれるって思ったんだ。だから証文をスルことにした。途中で証文を抜き取って走った。やつらが来ることを教えないけいけないだろ。それからは、あんたたちも知っての通りだよ」

娘は歪んだ顔で鉄斎のこを見つめた。

「あんたとの約束を破っちまったね。この手首の傷を見たら、本当にこの稼業<sup>かせぎ</sup>から足が洗える気がしてたんだけど。でも、またやつちゃった。この手首、あんたにやら斬り落とされてもいいよ。それで、お幸ちゃんが自由になれるなら……」  
娘の頬<sup>ほお</sup>を伝った大粒の涙は、畳の上<sup>たたみ</sup>にこぼれ落ちた。

そこにやってきたのは、東州屋善次郎だ。くしくも吾妻橋事件の四人が揃ったことになる。

「徳兵衛さんから、お幸ちゃんという娘のことを聞きましてね。借金は十両だそうですね。この娘さんに抜き取られた金がちょうど十両。島田さんがいなければ、なくなっていた金です。これも何かの縁でしょう。この金を、お幸ちゃんとやらのために使ってください」

善次郎は鉄斎の前に、十両を置いた。

「これで、私は十両の損。この娘さんも、スツた金を取り上げられて十両の損。おあいこですなあ」

鉄斎は深々と頭を下げた。

「お前さんは、こんな人の懐から金をスツたんだ。恥ずかしくはないか」  
娘は小さく頷いた。

「お前さんなら、きつと足を洗えるさ。ところで徳兵衛さん、困りましたなあ。証文もここにあるし、十両もある。どうしたものか……」

徳兵衛は嬉しそうだ。

「島田さん、この前、言われたことを覚えていますか。『自分たちの振る舞いが、天に恥じないことならば、なんとかなる』と。これが、その答えなのでしょうな」

鉄斎の目にも涙が光った。

「それじゃ、お幸ちゃんのところに行くか。久しぶりの再会だろう」  
「こんなあたしが、お幸ちゃんに会えるわけないだろ。あんた、女心がまるでわか  
つちやいないなね」

その夜、お菊は、お幸に看取<sup>みと</sup>られながら、静かに息を引き取った。万松<sup>まな</sup>の借りて  
きた棺桶が、本当に役立<sup>やくた</sup>つことになる悲しい夜だった。

翌日、鉄斎は河文に十両を返済し、お幸の件はすべて清算された。お幸は善次郎  
の計らいで、東州屋に住み込みで働くことになった。女スリの行方はわからない。

徳兵衛は自宅で、鉄斎に酒を振る舞った。

「お菊さんとお幸ちゃんのいた家が空いてしまいました。どうです、住んでみて  
は。長屋暮らしも悪くはありませんよ」

こうして、鉄斎は、おけら長屋の住人となった。